

矢野 羽衣子

1. 事業実施の目的

本事業では、バヌアツ共和国を訪問し、来年度以降に行う予定のデータ収集を中心とした調査計画を立てるための情報を得ることを目的とする。

博士課程での研究を含む長期的な目的は、オセアニアのバヌアツ共和国のホームサインについての言語学的特徴を解明することである。そのための第一歩として、バヌアツ共和国のエスピリトゥサント島およびエファテ島で使われる手話についてデータを収集し、記述する。これらの島で使われているろう者のコミュニケーションを研究対象とし、それぞれの言語学的特徴を、文化、歴史、データ保存の観点から分析する。とくに、各手話の発生のきっかけやその特徴や、各話者の生活様式や職業、天候の特徴が手話にも反映されているかどうかについて考察する。

バヌアツ共和国の手話言語に関する先行研究が少ないため、現地で次の 3 名の関係者に直接面会し、現地におけるろう者の言語、背景、状況についてインタビューを行い情報を得る。また、来年度以降の現地調査に向けて、インフォーマントとなる話者や協力してもらえらるろう者を紹介してもらう。

- ・ ジュディス・ヤンハンバス氏 (バヌアツ障害者協会プログラム・マネージャー)
- ・ アンジェリーナ・バルガス氏 (バヌアツ共和国政府教育研究省カリキュラム開発ユニット (Curriculum Development Unit Port Vila, VANUATU))
- ・ トニー・バッテン氏 (Pikinini Playtime School 管理者)

なお、この 3 名は手話ができないため、同時期にバヌアツのろう教育に関する研究のために現地に滞在予定のレイチェル・マイルズ氏に手話通訳を依頼する。マイルズ氏からは、加えて、バヌアツろう教育の状況について情報を得る。

今回、現地でこれらの関係者に直接話を聞き、情報を得ることにより、来年度に予定している長期のフィールドワークの計画をたてるために必要な手話言語やろう者に関わりがある活動についての最新の状況を、背景情報も含めて広く把握することができる。また、現地滞在中に何らかのろうコミュニティの活動がある場合には、参与観察に入らせてもらうことを検討している。参与観察が実現した場合には、バヌアツのろう者にも言語、背景、状況に関するインタビューを行う。

2. 実施場所

- ・ SIL Vanuatu campus located at Tebakor across from Coral Motel
カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院生レイチェル・マイルズ氏との打ち合わせ
- ・ Vanuatu Society for people with Disability office

バヌアツ障害者協会プログラム・マネージャー ジュデイス・ヤンハンバス氏との面談

- ・ Tana Russet Plaza Port-Vila

バヌアツ共和国政府教育研究省カリキュラム開発ユニットの責任者アンジェリーナ・バルガス氏との面談

- ・ Gaston Chocolat - Vanuatu Chocolate

バヌアツ共和国ろう者レニー・トーマス氏との面談

- ・ Pikinini Playtime School

Pikinini Playtime School エゼキエル・イゼキエル先生との面談

3. 実施期日

2023年7月28日（金）～ 2023年8月5日（土）

4. 成果報告

●事業の概要

(a) 現地のろうコミュニティの基本情報の収集：

カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院生レイチェル・マイルズ氏と面談し、バヌアツ共和国のろう者の状況やPikinini Playtime Schoolの生徒や手話について情報をいただいた。また、8月1日からPikinini Playtime Schoolに通ってマイルズ氏の研究データ収集を手伝うなかで、ろうの生徒との会話を通して現地の手話を身につけ始めた。この方法を進めることで将来的に現地のろう者と直接話せるようになる見込みである。さらに、マイルズ氏同伴のもと、現地在住のろう者であるレニー・トーマス氏を訪問した。トーマス氏からは、手話表現やホームサイン使用者の状況や数、ろう者の人口割合に関する情報を得た。

(b) 今後の調査の準備：

バヌアツ共和国政府教育研究省カリキュラム開発ユニットのアンジェリーナ・バルガス氏を訪問した。バルガス氏は、政府主導によるバヌアツ共和国内のホームサインの存在に関するデータ収集の責任者である。来年度、エスピリトゥサント島でホームサインのデータを収集したいことを伝えたところ、独立行政法人国際協力機構（JICA）の現地オフィスを通して、バルガス氏の手で収集できるかどうか問い合わせただけになった。現在、回答待ちの状況であるが、来年の調査までに準備ができるめどが立ったと考えている。

バヌアツ障害者協会プログラム・マネージャーであるジュデイス・ヤンハンバス氏と会った。バヌアツにはエファテ島とエスピリトゥサント島にそれぞれ障害者協会があることを説明していただき、今後エスピリトゥサント島を調査する場合は障害者協会ネリー・カレブ氏と連絡を取ることを勧められた。現地調査が決まった場合、現地での管理責任者であるカレブ氏に連絡をする計画である。

(c) ろう児の教育環境の視察：

Pikinini Playtime School を訪問し、同校のエゼキエル・イゼキエル先生に、ろう生徒の背景や状況を説明していただいた。そのなかで、以前はバヌアツの教育では障害者を受け入れる学校がなかったため、ろう児はフィジーにあるろう学校へ行って教育を受け、その時にフィジー手話を身に付けたこと、また、Pikinini Playtime School がバヌアツで最初にできた特別支援学校であり、この学校ができてからはじめて障害のある生徒を現地で受け入れることができたことなどを知ることができた。

ろうの生徒は7名おり、そのうち2名（12歳と17歳）がフィジーろう学校に通った経験があった。その他の4名（10歳から14歳）は、Pikinini Playtime School に入学してから手話を覚えた。しかし、Pikinini Playtime School の幼稚部に在籍する5歳のろう児1名は、手話が全くわからなかった。幼稚部の施設は、小学部や中学部の建物から離れているため、他のろう生徒との交流が今までになかったとのことである。また幼稚部には、ろうの教員が所属しているが、この生徒の担任ではなかったため、直接指導ができていないことがわかった。そのため、矢野とマイルズ氏が8月1日から4日までの四日間、幼稚部に通い、色の名称（赤・黄・緑・青）や立つ、座るなどの基本動詞などのPikinini Playtime School に通っているろう生徒が使用する手話を教える試みを行った。この間、ろう児自身が手話表現を表出することはなかったが、3日目には、こちらが表出した表現に対する理解ができていたことが確認できた。これはたとえば、色であれば、対象となる色を指さす、また、「立つ」、「座る」などの基本動詞については実際にその動作をするという形で、確認できたものである。8月4日は、ろう児が体調不調のため会うことができなかった。バヌアツにおいても、ろう児が手話言語を習得するための環境をしっかりと整える必要があることがわかった。

●本事業の実施によって得られた成果

手話表現やホームサイン使用者の状況や数、ろう者の人口割合に関する情報を得ることができた。また、これから、今後の調査準備を進めるにあたり、具体的な進め方や連絡先について、重要な情報が得られた。さらに、首都であるポートビラにおけるろう児の教育環境の一部を知ることができたため、現地における手話言語使用者の状況や環境を推測することができるようになった。

●本事業について

現地調査の機会をいただき、貴重な情報をたくさん得ることができ、感謝しています。